



自宅を開放してみれば

農村での高齢化が取りざたされるが、都会でも高齢化は著しく、老人の一人住まいが急増している。住宅地は隣近所の付き合いが希薄であり、子どもはマンションやアパートに集中しているだけに、寂寥感は強い▼東京都N市に住むが、ここは典型的な住宅地。住人が行き交っても挨拶することは稀で、自治会もほとんど機能していない。朝夕、デイケアの送り迎えのマイクロバスだけが頻繁に走る▼こうした中、ささやかな地域コミュニティづくりにといいことで、この九月から月一回、午後三時から五時の間、自宅を開放して、隣近所や友人の集まりを始めた。中身は隣町に住む某氏の落語や小話と、これをネタにしての若干のやり取り。皆でギター伴奏に合わせての合唱。そしてお茶を飲みながらの懇談。お年寄り数人程度を想定していたところが、若いお母さんに小さな子どもたちも含めて一五人前後の集まりに▼やってみて感じるのは、子どもの存在の大きさである。子どもは泣いたり動き回ったり。いるだけで場が和む。またお茶出しや会費徴収等、参加者に役割を分担してもらっただけで、目の輝きが変わってくる。そしてその成果というには早いが、ここでの集いが共通の話題となつて、隣近所と話しがしやすくなつた▼これは身近なところでの協同へのトライアルでもある。継続が大事と肝に銘じているが、参加者には客としてではなく、当事者として参画してもらっことも大切だ。一二月は忘年会となるが、会が終わって、何人かが残ってビールを飲むことになるのを期待している。(土着菌)